3 そのほかの出土遺物

出土遺物の総数は、およそ16,000点[*1]あり、そのうち土器類は、13,000点[*2]余りを占める。その中から、「図示に堪えるもの」、細片については「特徴が表現できるもの」を選び出し、層位ごとに掲載した。各層の様相を一定程度反映させるように注意を払ったが、なお、取り上げ時点での層の上下の錯誤は否めない。

土器は須恵器が9割以上を占めることから、記述の便宜上、それ以外を明記した。また、「坏身」に分類したものは、高台の付かないもの、あるいは高台そのものが無い時期に属するものは特記し、それ以外はすべて高台の付く坏身である[*3]。

以下、観察の要点と思われる諸特徴を拾いながら概観する。

a．土器

ＳＤ１検出面（図67　1～7）

坏身(1,5)　(1)は、高台の外側で坏部が打ち欠かれ、高台の内側と内面に墨と煤が付着している。打ち欠かれた坏部の断面にも煤が付着しており、硯に転用した後に、さらに灯心の抑えに利用したものと思われる。(5)は、無台の坏身である。底部が平らで、体部との境界が明瞭に屈折する。体部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさめられている。

坏蓋(2,3)　(2)は、かえりのある蓋。(3)は、直裁された口縁部が特徴である。

盤(4)　灯明に転用されたもので、灯心が掛かっていた口縁部の一点を中心に、内外面の一致した範囲に油煙が付着している。

灰釉陶器 碗(6,7)　高台が内わんする三日月形で、外側下方に稜をなす。(6)は、高台の内側を利用した転用硯である。

ＳＤ１-Ｒ１（図67　8～17）

坏身(8～11)　(8)は、かえりのある坏身である。(9)は、転用硯である。(11)は、無台の坏身である。底部に丸みを持つ。

坏蓋(12,13)　(12)はつまみのない坏蓋で、天井部に丸みがあり、口縁部との境目に沈線をめぐらせている。(13)は、転用硯である。器壁が厚く重量感があり、つまみの頂部が平らで、裏返して置いても安定している。天井部から口縁部まで直線的で、端部が丸くおさめられている。

鉢(14)　金属器を模したいわゆる仏鉢で、大きさは口縁部径20.4㎝、最大径24.4㎝、器高14.2㎝ほどに復元できる。体部下半はヘラ削りにより、胎土に含まれる細粒が動き、器表に無数の筋が付くが、上半部はナデて滑らかに内わんさせ、端部は丸くおさめられている。

＊1 破片数であり、個体数は考慮していない。なお、「大型植物化石」(種子類)を含む。Ⅳ自然科学分析 2大型植物化石 p.204
＊2 墨書土器を含む。
＊3 表9「そのほかの出土遺物一覧」p.186

長頸瓶(15)　比較的長い頸と丸い肩部を持ち、頸部に２本の沈線と、その間に幅2.1㎝の櫛状工具を、縦方向に６～11㎜間隔で刺突して文様が施されている。灰がかかり、灰緑色を呈する。

盤(16,17)　外反して立ち上がる口縁部と、内わん気味に踏ん張る形の高台が特徴である。

ＳＤ１-Ｒ２(図67　18～22)

甕(18)　同心円の当て具、格子目のタタキ具で調整され、口唇部の屈曲が強い。

坏蓋(19)　口縁部から1.5㎝ほど内側に、緩い突線状のかえりのある蓋である。

坏身(20,21)　(20)は、口径に対して深みのある無台の坏身で、渦巻き文を残してはいるものの、ナデ調整された丸みのある底部を持つ。灯明に転用されており、灯心が掛かっていた口縁部の一点を中心に、内外面の一致した範囲に油煙が弧状に垂れて付着している。

土師器 甕(22)　外面は縦ハケ、口縁部の内側にのみハケ、内面は口縁部から５㎝程はナデ、それより下をケズリ調整している。口縁部が「く」の字に外反し、口縁部の外側に工具を当てて面取りしながら、端部は軽くつまみ上げられている。おそらく長胴で丸底になると思われる。

ＳＤ２(図68　23～55)

坏身(23～31,33～38,42,46,47)　(23～26)は、井泉１(SK36)からの出土である。そのうち、(23,24)は灯明に転用されている。(25)は、赤みがかった緻密な胎土で、表面が極めて滑らかである。(26)は転用硯で、口縁部の径は26.9㎝と坏身としては大形である。(33～38)は無台の坏身で、そのうちの(33,34,36,37)は灯明に転用されている。(35)は、３分の２ほどの内外面の一致した範囲に油煙が厚く付着し、灯心の掛かった痕がないことから、採煤(さいばい)＊1に用いられたものと思われる。なお、版組の段階で、底部外面に付着した煤に紛れていた墨書「冨(徳)」に気が付いた。墨書土器(49～51)＊2の「冨徳」と同じ筆致である。(42)は、双耳坏の把手(耳)部分である。(46,47)は転用硯で、特に(47)は、高台の外側で丁寧に打ち欠かれ、机上の据わりが良い。

碗(32)　灰釉陶器の碗に似た体部を持ち、高台は低く扁平で、高台の接地面に菰のような圧痕がある。

盤(39,40)　(39)は灯明に転用されている。(40)は高台の下端が、外側へ鋭くつまみ出された形が特徴である。

鉢(41)　金属器を模倣した仏鉢。口縁端部をわずかに外反させている。

土師器 坏(43)　暗文が施されている。色調は暗灰黄色で、胎土がやや粗雑である。

坏蓋(44,45,48～55)　(44,45,48)は転用硯である。(52～55)は、口縁端部から1.0～1.5㎝内側に、緩い突線状のかえりのある蓋で、そのうちの(52,54)は転用硯の可能性がある。

＊1 灯明にかぶせて器壁に油煙を付着させ、それを集めて墨か、あるいは墨液の原料とする。
＊2 Ⅲ遺物　１墨書土器 a.文字「吉祥の文字」p.34

ＳＸ１検出面（図69･70　56 ～ 100）

坏身（56 ～ 72）　（58, 59, 64）は、転用硯である。（67 ～ 71）は無台の坏身で、（67）は灯明に転用されている。灯心を掛けるための打ち欠きが２カ所あり、それらを中心に油煙が弧状に垂れて付着して黒光りしている。（67 ～ 70）の底面は、ヘラ削り調整が丁寧であるのに対し、（71）は、ヘラで切った痕が渦巻き状に残る。（72）は、双耳坏の把手（耳）とその幅で残る口縁部の一部である。

盤（73 ～ 77）　いずれも斜めに立ち上がる口縁部と、高めの高台が特徴だが、（74）のみ器壁が厚く、やや重量感がある。（74 ～ 76）は硯、あるいは灯明に転用されたもので、特に（77）は、内面に厚く煤が付着しており、採煤用に用いられた可能性がある。

坏蓋（78 ～ 82, 92）　（78, 79, 82）は、転用硯である。特に（82）は、つまみの欠損部分を平らに研磨して据わりを良くしている。（92）の口縁部は直裁され、体部は天井部までは強く外反し、欠損部の少し手前から、天井部へとつながる丸みが看守できる。おそらく金属器を模した形で、環状のつまみが付くと思われる。

高坏（83, 84）　透かしのない高坏で、（83）は坏部が皿状、（84）は破損したところから口縁に向かうわずかな立ち上がりがある。

鉢（85, 88）　（85）は仏鉢。（88）の平鉢は大形で重量感があり、一対の把手（双耳）が付く。

土師器 坏（86）　暗文が施されている。

長頸瓶（87）　胴部の最大径が上半部に寄るものの、おおむね球形で、頸部と胴部の接合部に微かな突帯がめぐる。

甕（89 ～ 91）　（89）は、平底。（90, 91）は、尖底と推定される。

平瓶（93）　稜を持たない丸い胴部の平瓶で、下半はヘラ削り、最大径を測るところで沈線をめぐらせ、そこから上はナデ調整されている。

土師器 甕（97）　外面は縦ハケ、内面は横ハケで、口縁部はナデられている。胴部から口縁部へは直接屈曲せず、一旦垂直気味に立ち上がる短い頸部を持ち、口縁端部は丸くおさめられている。

土師器 甑（98）　外面は下部まで、内面は下から５㎝前後のところまで縦ハケ調整が施されている。底部は、中心に橋状の部分を残し、壁面の外周から孔が穿たれ、体部の下端を尖らせている。

甑（99, 100）　同一個体で、口縁部の破片（99）外面中ほどの把手が付くあたりから下に、縦方向の弱いヘラ削り調整の痕が残る。焼きが悪く、灰白色を呈する。

灰釉陶器 皿（94, 95）　耳皿と皿である。

中世陶器 碗（96）　淡緑色に発色した釉薬が、高台や底面を含む器の表面全体に施されている。

ＳＸ１-Ｒ１（図71･72　101 ～ 147）

坏身（101 ～ 111, 133, 134）　（101, 102, 104, 105）は転用硯、（106）のみ黄灰色を呈し、高台の端部が丸い。（108）は、双耳坏である。（109 ～ 111）は無台の坏身。（107, 109）は、煤の付着のしかたから、採煤に用いられたと思われ、特に（109）は、底部内面の偏った位置に、炎が当たっていた点（炎が直接

器壁に触れていた箇所には煤が付かず、その周りに環状に付着する現象）が確認できる。（133, 134）はかえりのある坏身である。

盤（112 ～ 120）　（116, 117）の高台には、体部寄りの位置に透かし穴がある。（116）は、径3.0㎜の丸い穴、（117）は、刀子で穿たれた四角い穴であり、残存の程度から推すと、いずれも三方向に穿たれていたものと思われる。

皿（121）　体部が反りを持って大きく開き、高台の端部に幅の狭い平らな面を持つ。

坏蓋（122 ～ 132）　（122 ～ 130）は、口縁端部を下方に短く屈折させた、つまみの付く坏蓋である。（122, 123, 125, 129）は転用硯、（124）は採煤用、（130）は内面の偏った位置に煤が付着することから、灯心の抑えに利用されたものと思われる。（131）は、天井部が平らで、短い縁部が垂下する瓶類の蓋と思われる。（132）は、かえりのある坏蓋である。

鉢（135, 140）　（135）は、底部と体部の区別がない丸い鉢である。（140）は、漆を保管した容器と思われる。平底で、肩部が「く」の字に屈曲して頸部をなし、そこから少し外反しながら口縁部が立ち上がり、わずかに稜をなす。口縁端部は平らである。内面全体が漆と思われる暗褐色の皮膜に被われているため、乾燥して剥離することを防ぐために水中保管している。

高坏（136）　脚部に２条の沈線がめぐる。

捏鉢（137）　焼成が悪く、淡黄灰色を呈する。平板状の厚い底部を持ち、その側面を指ナデにより窪ませている。底板と器壁の接着部は厚く、徐々に厚みを減じながら立ち上がるため、底部内面は丸い。底面の外周から１㎝ほど控えた内側全体に、径３㎜の竹管状の棒による、深さ１㎜程度の弱い刺突が無数に施されている。

長頸瓶（138）　最大径に対して高台の径も大きく、少し扁平な印象の胴部である。

短頸壺（139）　胴部と口縁部との境に沈線がめぐり、口縁部が垂直に立ち上がる。

甕（141 ～ 143）　（141）は、口縁端部は平らで、わずかに内傾し、外方には段の稜を持つ。格子状タタキと青海波状の当て具痕がある。底部の形状や把手の有無は不明。（142）は、口縁端部をつまみ上げ、端部の下方に鋭い稜を持った突線をめぐらせている。ほかの須恵器に比べて暗い灰色を呈し、胎土に白色粒を含む。（143）は大形で、器壁は厚さ14.5㎜を測り、口径は64㎝ほどに復元できる。頸部に波状の文様が施されている。

土師器 甕（144 ～ 146）　（144）は、口縁端部が丸くおさめられ、内面はケズリ調整されている。（145）は、口縁部外側に面を取り、端部が軽くつまみ上げられたもの。（146）は小形で、口縁端部は平らである。

小瓶（147）　多壺瓶の肩に乗る子壺の可能性もある。

ＳＸ１-Ｒ２（図73　148 ～ 166）

坏身（148 ～ 152, 156, 157, 159）　（149, 156, 157）は転用硯、（150, 159）は灯明に転用されている。（159）は金属器を模した形で、「碗」に分類されることがある。底部と坏部の境を面取りして丸くし、口縁端部を水平方向に強く開かせている。

鉢(153,158)　(153)は焼成が良く硬質で、ほかの須恵器に比べて明るい灰色を呈する。沈線により、口縁部から下へ幅約３㎝ごとに２つの文様帯を区画し、それぞれに波状文が施されている。(158)は、底部と胴部の境を軽く面取りして丸くしている。

長頸瓶(154)　肩部に鋭い稜を持つ。

壺(155,165)　(155)は胴部から下で、高台から胴部への立ち上がりが丸い。(165)は、頸部中ほどが垂直に立ち上がる形が特徴で、胎土に白色粒を含んでいる。

土師器 坏(160)　暗文が施されている。

坏蓋(161,162)　口縁端部を下方に短く屈折させた、扁平なつまみのある坏蓋である。

土師器 甕(163)　外面は縦ハケ、口縁部内側はハケ、胴部はケズリ調整で、口縁端部は丸くおさめられている。

甕(164,166)　(164)は、ヘラにより口縁部内面に横方向に一筋と、１～2.5㎝の間隔で縦方向に筋が付けられている。(166)は尖底の甕で、頸部から口縁部まで屈曲せずに素直に立ち上がり、口縁端部は平らである。外面の調整は、底部に近いところが細かい格子目、胴部から頸部までが粗い格子目のタタキ具を使い分けている。内面は同一の当て具で、青海波状。

ＳＸ１-Ｒ２-Ｍ１～Ｍ３(図74　167～183)　Ｍ１・２層は、Ｒ２層が開析された窪みへの堆積である。Ｍ３層は、Ｍ層を掘り下げる過程で認識していた部分だが、精査の結果、Ｒ２層と判定された。したがって、Ｍ３層として取り上げた遺物は、Ｍ層の幅を直下のＲ２層に垂下した範囲のもので、Ｒ２層の中でも最も深い部分に当たる(図８)。

Ｍ１

坏身(167～169,171)　(167,168)は転用硯で、(168)の高台内側には墨書があるが解読不能。(169)は無台の坏身で、底部は回転ヘラ切りのままである。(171)は、かえりのある坏身である。

碗(170)　底部外縁に稜をなし、直線的に体部が開き、口縁端部は平らである。

蓋(172)　小形で口縁部がわずかに垂下する、瓶類の蓋と思われる。

Ｍ２

坏身(173,174)　(173)は、暗い青灰色を呈し、胎土が緻密である。(174)は、金属器を模した形で、「碗」に分類されることがある。

坏蓋(175)　つまみのある蓋で、内面と欠けた断面にも煤が付着していることから、灯心の抑えに利用されたと思われる。

甕(176)　肩部から頸部までは丸く外に張り、強いロクロ引きにより器壁がうねるように凹凸をなす。肩部から下は、当て具とタタキ具で調整されている。

Ｍ３(Ｒ２層の最深部)

坏蓋(177,180,181)　(177)は、かえりのある坏蓋である。(180,181)は、つまみのない坏蓋で、天井の丸みや天井部と口縁部の境に沈線をめぐらせる形状、法量が互いに酷似するが、(180)は暗灰色を呈し、胎土が緻密であるのに対し、(181)は灰白色を呈し、胎土に白色粒が目立つ。

坏身(178)　かえりのある坏身である。

碗(179)　体部は、高台から大きく傾斜して開き、口縁端部を少し外反させている。

壺(182,183)　(182)は小形の短頸壺で、灰を被り、肩部から垂れて灰緑色を呈する。(183)は、平らな底部である。

ＳＸ２検出面(図75　184 ～ 186)

坏蓋(184)　つまみのある蓋の天井部で、器壁が厚く比較的大形である。

土師器 坏(185)　やや深みのある坏で、暗文が施されている。

製塩土器(186)　棒状の脚部[*1]。淡赤色を呈するが煤の付着や結晶の析出はみられない。

ＳＸ２-Ｒ２(図75　187 ～ 196)　(187 ～ 189,193,196)はＣ(砂利)層からの出土である(図８)。

坏蓋(187,188)　(187)は、口縁端部から1.5cmほど内側に、断面三角形の突線状のかえりのある蓋で、径が21.7cmと比較的大形、縁部に煤が付着している。(188)は、扁平なつまみの付く天井部分で、重厚な大形品であり、内面に煤が付着している。

皿(189)　径24cmほどに復元できる。

坏身(190)　口縁の一部と高台部のみ４分の１程残存した細片。

高坏(191,192)　坏部と脚部で、坏の底部と体部の境目に稜はなく、口縁端部は丸くおさめられ、脚に透かしはない。

鉢(193)　わずかに外反する短い口頸部を持つ深鉢で、ゆるやかに屈曲する肩部を持つ。

長頸瓶(194,195)　(194)は、頸部が強く絞り込まれ、内面にねじれ痕を生じ、口縁端部を鋭く尖らせている。(195)は胴部下半で、底部と体部に明瞭な角度をなさず、胴部が全体に丸い。

土師器 坏(196)　暗文が施されている。

ＳＸ２-Ｒ２-３(図75　197 ～ 204)

坏身(197 ～ 199)　無台の坏身で、(197)は、底部と体部の間に明瞭な稜をなし、底部外面はロクロによるヘラ削りで平らに調整されている。(198)も同様の作りであるが、底部に丸みを持ち、淡赤褐色を呈する。(199)は、底部と体部の間に稜はなく緩やかに屈曲し、底部のヘラ削りは１cm(指１本分の幅)内側から行われている。

甕(200)　尖底と思われる。頸部から素直に「く」の字に屈曲させ、口縁部外側に面を持ち、端部を軽くつまみ上げている。

坏蓋(201)　つまみのない坏蓋で、形状や法量が(180,181)と似ている。胎土は比較的緻密で白色粒が混入し、内面から断面の中ほどまで暗赤褐色を呈する。

壺(202)　小形の壺で、中ほどより上で最大径を測るものの、屈曲は緩やかで体部はおおむね丸い。底部はヘラで起こされ、中央部に突部を残している。

高坏(203)　皿状の坏部を持ち、残存部分には透かしは認められない。

＊1 煎熬(鹹水を煮詰める工程)や焼塩(さらに焼いて堅塩をつくる工程)の際に海浜に突き刺す部分。

土師器 甕(204)　外面は縦ハケ調整、頸部にハケ目の上端が消えるほどの強い横ナデにより稜が生じ、口縁部はやや受け口状となる。胴部内面は、強くナデ上げられている。井泉２に伴う甕(4)[*1]や、そのほかの甕(22, 97, 144 ～ 146, 163)とは、形状、調整が異なる。

ＳＸ１・２接合（１・２）（図76･77　205 ～ 213）

平瓶(205, 210)　天井部が丸く、胴部にも稜を持たない。

長頸瓶(206, 211)　(206)は、胴部が直線的で肩部に稜を持ち、高い高台が外方へ張り出す形が特徴である。(211)は、底部と体部の境目に稜をなすが、体部には稜を持たず、丸く扁平である。

甕(207 ～ 209, 212)　(207)は、頸部は緩やかに外反するが、口唇部は水平方向に伸び、口縁部で稜をなして上方へ屈曲する。底部を欠くが、尖底を持つと思われる。(208)は、頸部から素直に「く」の字に屈曲させ、口縁部外側に面を持つ。(209)は、頸部と口縁端部下の強い横ナデにより、頸部に突線状の稜をなす。外面にタタキ目を残すが、内面はナデ調整されている。焼きが悪く、暗黄灰色を呈する。(212)は、肩の張りが緩やかな卵形の胴部を持ち、尖底である。

鉢(213)　一対の把手が付き、体部から口縁部はロクロナデ、底部はヘラで調整されている。焼きが悪く、灰黄色を呈する。

ＳＤ１とＳＸ１接合（１・２・３）（図78･79･80　214 ～ 224）　ＳＤ１とＳＸ１は、発掘区内では合流していないにもかかわらず、接合する資料がある。

盤(214)　外方へ張り出す高台を持ち、底部が口縁近くでやや垂れ下がる。

坏身(215)　底部が厚く、中心部が垂れて接地している。高台の断面は長方形で、内わん気味に取り付けられている。

水瓶(216)　胎土が緻密で灰白色を呈し、内面にはロクロで引き上げた時の白色の螺旋を残している。器壁は極めて薄く、最も薄いところで2.5㎜である。

長頸瓶(217)　胴部が直線的で肩部に稜を持つ。

壺(218)　胴部と頸部のつなぎ目に段を有する。

平瓶(219)　肩部に稜をなし、天井部は丸みを持つ。天井部の中央から肩部にかけて、「コ」の字形の把手が付けられている。

甕(220, 221)　(220)は、口縁部内側に段がなく、口唇部が下方に垂れる形が特徴で、胴部は肩が張る。(221)の口唇部は屈曲が強く、胴部は張りの弱い卵形。両者とも尖底を持つと思われる。

甑(222 ～ 224)　(222)は、口縁部が直線的で、端部にやや広い平坦面を持ち、胴部中ほどやや下に舌状の把手が付く。平板状の厚い底部を持ち、突部はナデ調整。底部の孔は５カ所確認できるが、径から推すと、少なくとも外周に６カ所穿たれていたと思われる。(223, 224)は、同一個体と思われる。口縁部に向って内わん気味に立ち上り、把手を欠くが、剥離痕から環状の把手であったことがわかる。底の突部はナデ調整。底部の孔は、中心に円形、その周りに長楕円形の孔を４つ配している。焼きが悪く、黄白色を呈している。

＊1　Ⅱ遺構　２主な遺構　c.自然流路(SD1)，大形掘立柱建物，橋状遺構，井泉２〈東２区〉「井泉２」p.30

Ⅰ～Ⅲ（図81　225～231, 233～246）　自然流路（SX, SD）に達するまでの表土、水田耕作土及び敷土からの出土である。

坏蓋（225）　金属器を模した形で、天井部を欠くが、環状のつまみが付くものと思われる。天井部に稜をなし、そこから口縁部までは外反して垂れ、口縁端部は丸くおさめられている。

盤（226, 227）　（226）は「皿」と言ってもよい形で、底部から口縁部への屈曲や反り方が、金属器を模した蓋の形状に似ている。

緑釉陶器 火舎（228）　1997･98年度に実施した「弥勒寺」講堂跡の調査において出土した四足の火舎に、今回出土した破片（矢印）が接合した。いかなる事情が関わっているのか興味深い。しかし、省察すれば、緑釉陶器の出土は極めて稀であるため、接合に気が付いたが、ほかの土器にも同じ現象がみられる可能性もあると考えておくべきだろう。

円面硯（229）　径26cmほどに復元される円面硯で、脚部に「十」字の透かしがある。

蓋（230, 231）　平らな天井部で口縁部が垂下する、瓶類の蓋と思われる。

土師器 坏（232, 233）　暗文が施されている。（232）は、ＳＸ１東岸の柱穴群[*1]の一つ（SK54）からの出土である。

灰釉陶器 碗（234, 235）　（234）は厚手で、わずかに外に開く断面矩形の角高台。（235）は薄手で、口径に対して器高が高く深みがあり、高台は三日月形で稜を持たない。

山茶碗 皿（236～238）（236, 237）は、底部と体部が直線的で器高が低く、灰白色を呈する。（238）は、体部が内わんし、器高がやや高く、暗灰色を呈する。

天目茶碗（239, 240）　（239）は、高台の体部からの削り出しの幅が狭く、内側は丸く窪めている。体部は直線的に開く。（240）の高台は、下へいくほど径を減じ、内側を極めて浅く平坦に削り出している。高台の接地面には糸切り痕が残る。体部は強く内わんする。

青磁 碗（241, 243～245）（241）は無文、（243, 245）は連弁文、（245）は高台の部分である。

近世陶器（242, 246）　（242）は灰釉の皿、（246）は重厚な大甕である。

なお、（242～244）は断面図に釉薬の厚さを表現した。

ｂ．瓦（図82～86　247～274）

226点の「弥勒寺」所用の丸瓦、平瓦が出土した。軒瓦は、軒平瓦が１点のみ、軒丸瓦は出土していない。この谷（弥勒寺西遺跡）に、瓦葺きの建物が存在したとするには極めて寡少で、何らかの事情で弥勒寺跡から運ばれ、この谷の堆積に紛れたものと考えられる。ただし、包含層のⅡ･Ⅲ層から若干の出土をみたが、ほとんどが自然流路内の堆積中からの出土であり、廃寺となった後の瓦礫としてではなく、古代における営為によるものと考えられる。

これまでの弥勒寺跡出土瓦の分類[*2]にしたがって集計した（表８）。なお、軒丸瓦[*3]は、出土していないため、表の項目から割愛した。

＊1 Ⅱ遺構 ２主な遺構 d.そのほかの遺構「ＳＸ１東岸の柱穴群」p.32
＊2 関市教育委員会 1986『国指定史跡 弥勒寺跡』・1988～90『国指定史跡 弥勒寺跡 －範囲確認調査報告書－』Ⅰ～Ⅲ
＊3 因みに、弥勒寺跡の軒丸瓦は、Ⅰ類（面違鋸歯文縁･複弁･連子1+5+9）、Ⅱ類（線鋸歯文縁･複弁･連子1+5+10）である。

表８　出土瓦の分類

分　類			点数	備　考
軒平瓦	Ⅰ類　四重弧文　顎無文		1	図83　255
	Ⅱ類　四重弧文　顎波文		0	
	不明		0	
	小　計		1	
丸瓦	Ⅰ類　有段(玉縁)式		6	図82　247～249
	Ⅱ類　無段(行基)式		2	図83　254
	不明		16	図82･83　250～253
	小　計		24	
平瓦	Ⅰ類　凸面布目		42	図83～85　256～267(256,263は、熨斗瓦か)
	Ⅱ類　凹面布目	a 凸面 斜格子	2	図86　273,274
		b 凸面 縄　目	17	図86　271,272
		c 凸面 平　滑	33	図85　268～270
		不明	19	
		小　計	71	
	不明		23	
	小　計		136	
丸瓦・平瓦の区別が不可能			65	
合　計			226	

c．鉄釘、石製紡錘車、土錘、砥石、銭貨、石器類、縄文土器(図87,88　279 ～ 301)

鉄釘(279,280)　(279)は、断面正方形で、頭を直角に折り曲げて扁平に熨されているのに対し、(280)は、断面が扁平な長方形で、頭は折り曲げられたままである。尖端から頭までの長さは、両者とも９㎝で、規格に則って製作されたことが推測される。

石製紡錘車(281)　径45㎜、厚さ16.0 ～ 17.5㎜、穿孔は両側から行われており、孔径7.0 ～ 7.5㎜、重さは52.8ｇである。粒子の細かい砂岩製で、両面とも平滑に研磨されている。

土錘(282 ～ 289)　いずれも土師質で、長さ34.0 ～ 52.5㎜、太さ12.0 ～ 18.5㎜、孔径3.0 ～ 5.5㎜。うち、３点はⅢ層及び表採、残りは自然流路内からの出土である。

砥石(290)　短冊形で、片面が極めて平らで据わりが良く、もう片面は、斜面をなす。小口を除く各面とも、中央部が特に平滑で使い込まれており、手に保持した使用法も想定できる。

銭貨(291)　径24.0㎜、孔は辺の中ほどが膨らみ、中心で6.0㎜、厚さは外縁で1.0㎜、重さ2.0ｇである。鋳文は「咸平元寶(かんぺいげんぽう)」と読める。北宋の咸平元(998)年に鋳造された渡来銭である。[*1]

石器類(292 ～ 299)　削器(292)、石匙(293)、石錐(294)、石鏃(295 ～ 297)は、いずれもチャート製。打製石斧(298,299)は、緑色片岩と凝灰岩製である。

縄文土器(300,301)　深鉢の底部と思われる。両者とも平底で、底部の側縁と体部の境目に押圧痕があり、(300)は体部に条痕が認められる。

＊1 兵庫埋蔵銭調査会 1996『日本出土銭総覧』

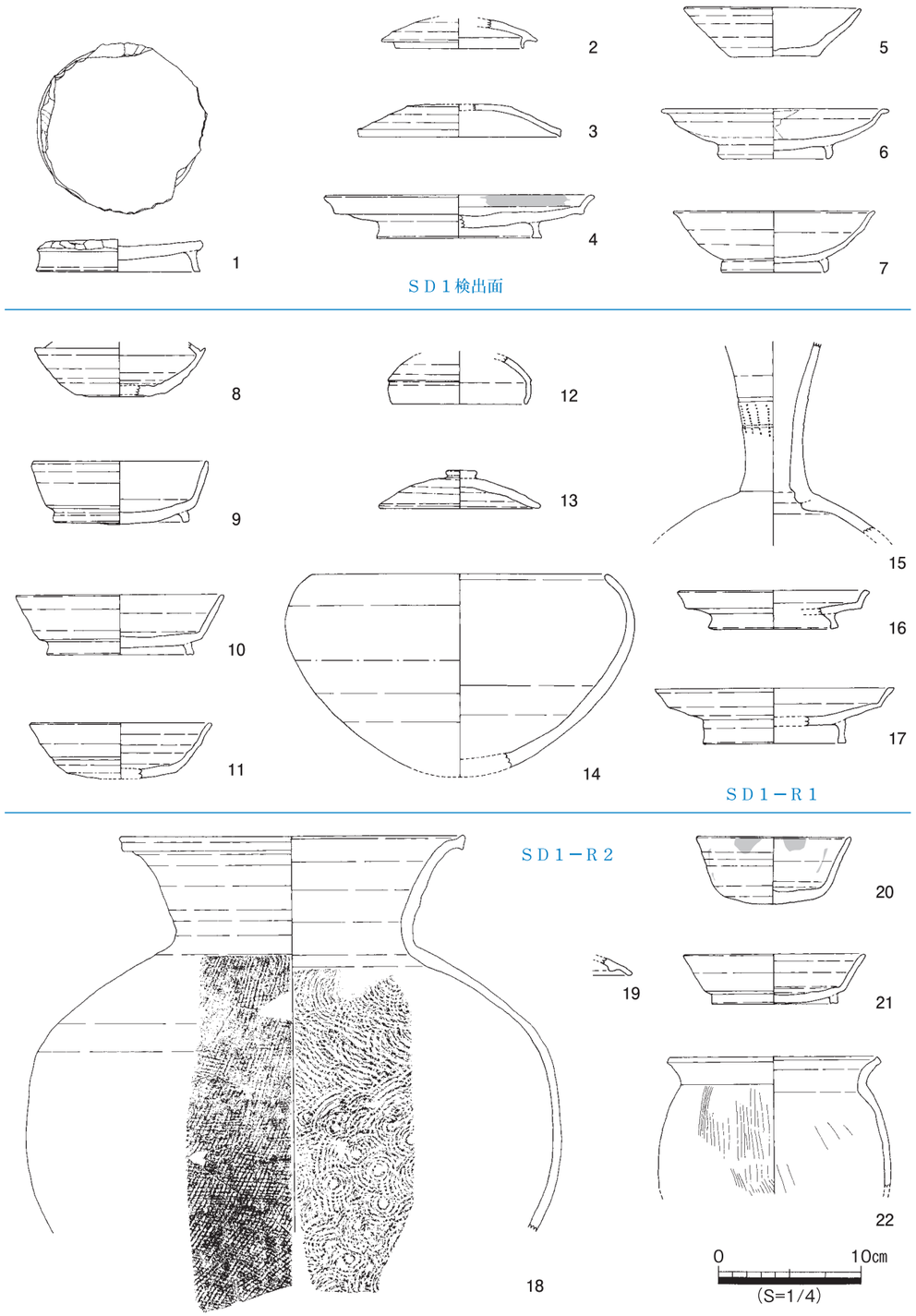
1
2
3
4
5
6
7
ＳＤ１検出面
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
ＳＤ１－Ｒ１
ＳＤ１－Ｒ２
18
19
20
21
22
0
10cm
(S=1/4)

図67　ＳＤ１

1
3
5
4
6
7
8
12
9
11
14
10
13
15
18
20
22

ＳＤ１

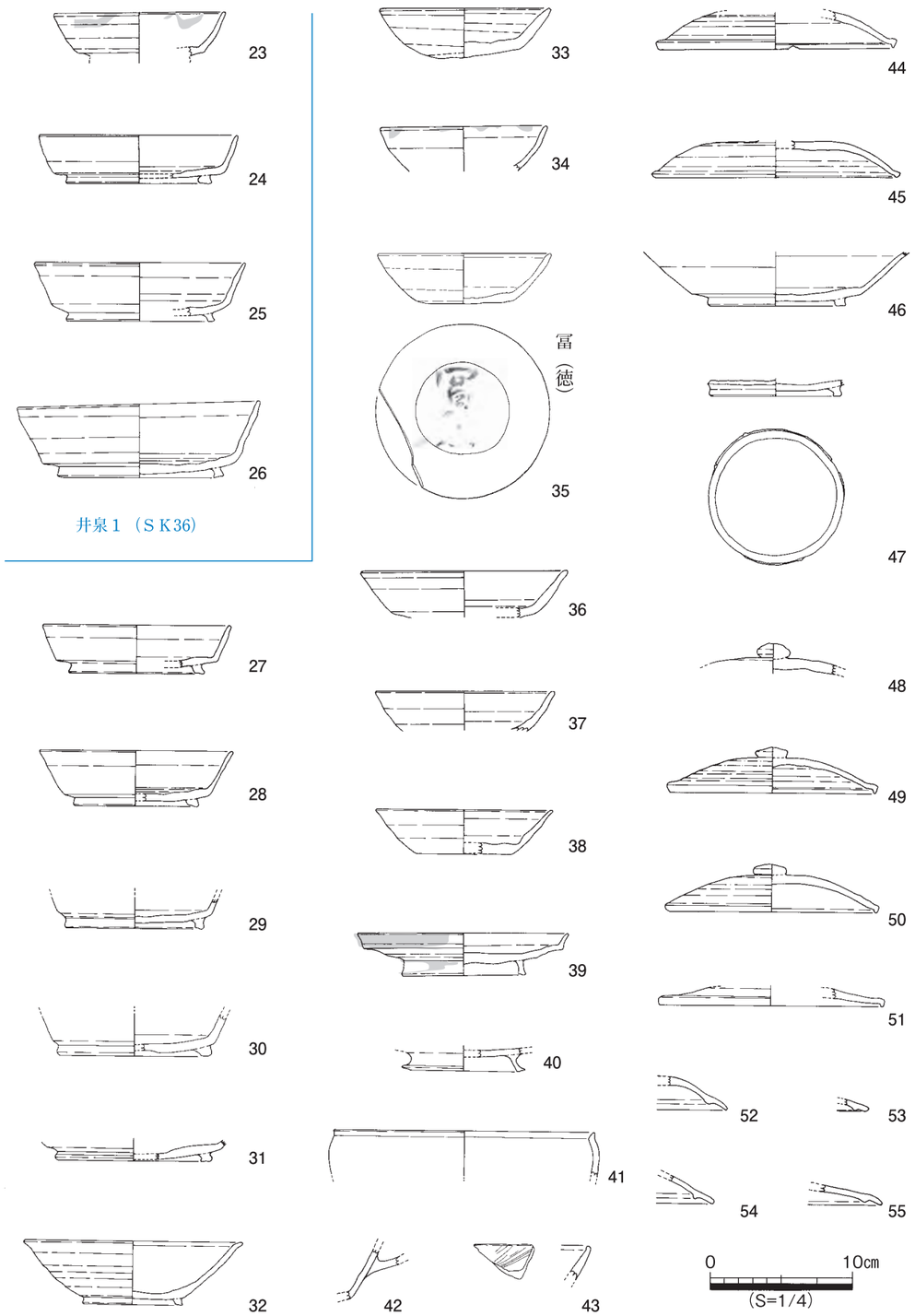

図68　ＳＤ２

ＳＤ２

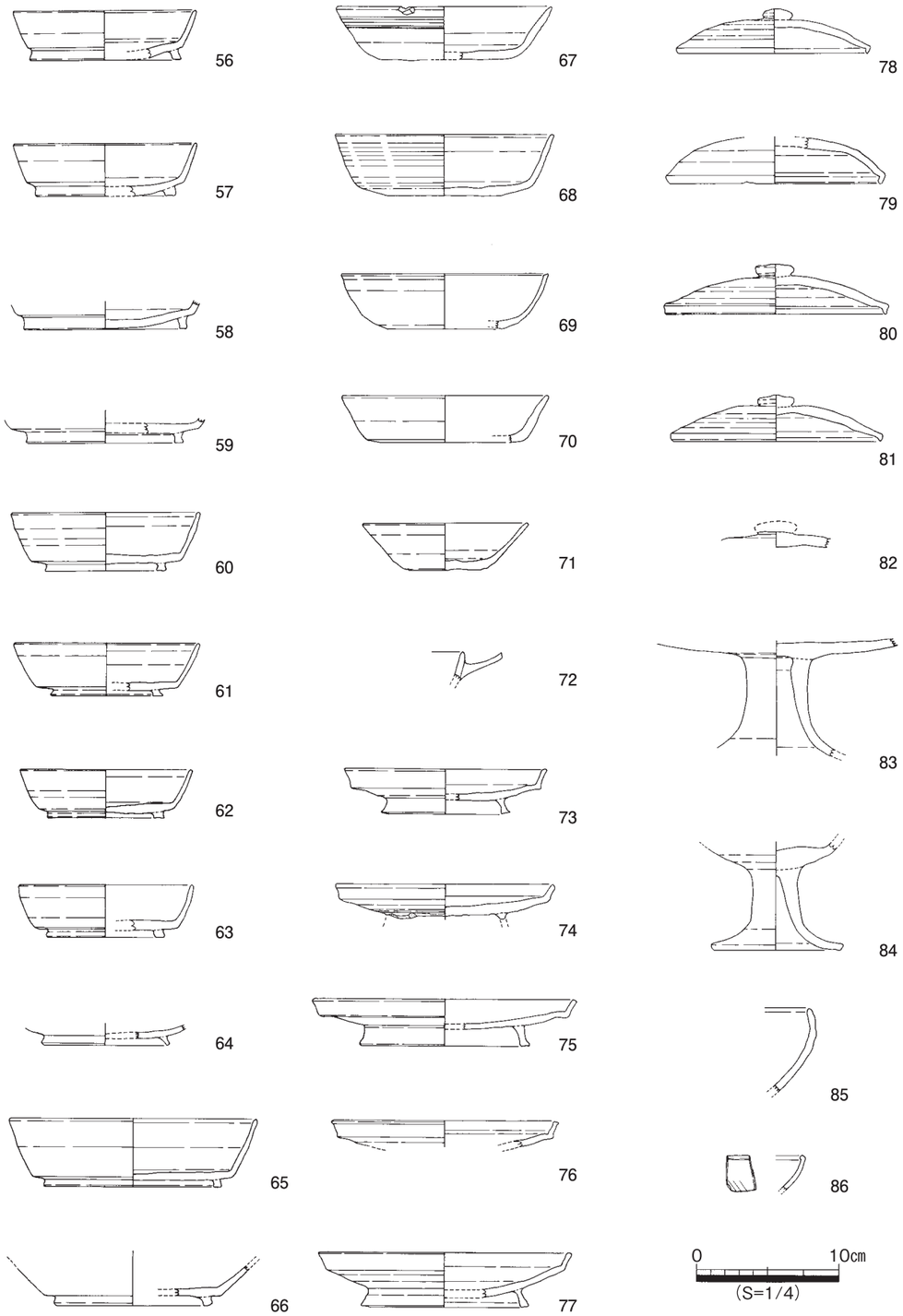

図69　ＳＸ１検出面(1)

ＳＸ１検出面(1)

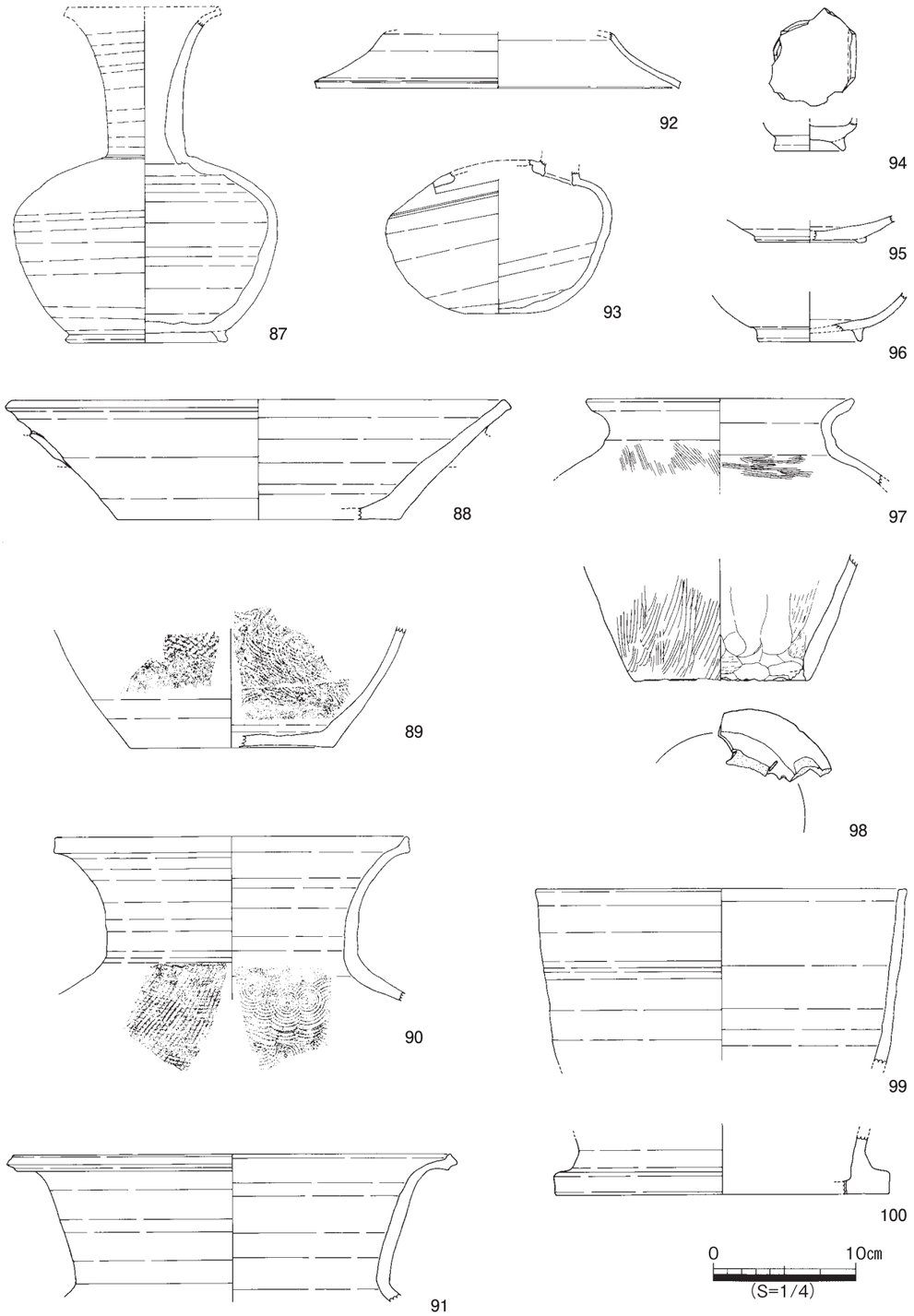

図70　ＳＸ１検出面(2)

ＳＸ１検出面(2)

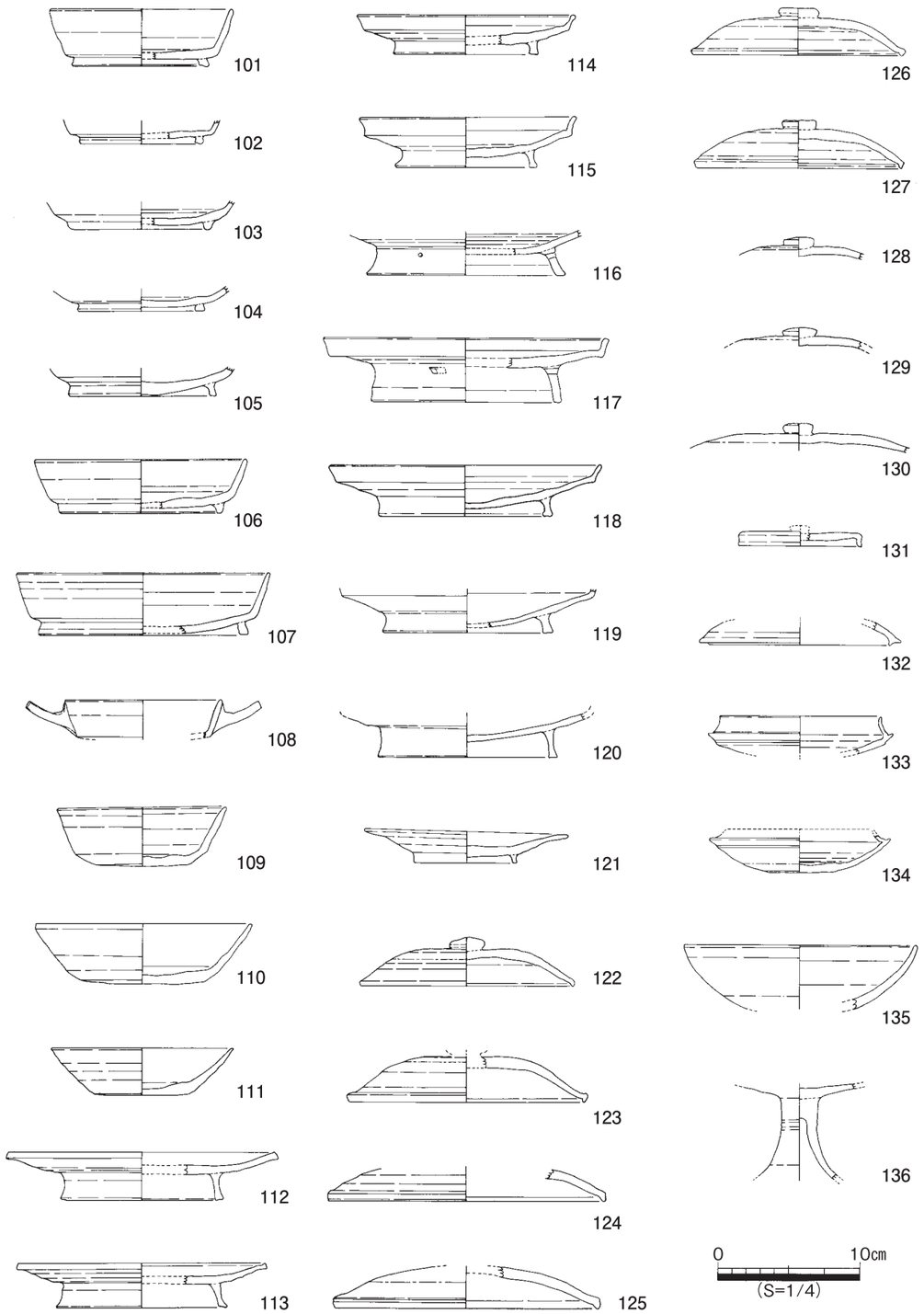

図71　ＳＸ１－Ｒ１(1)

ＳＸ１－Ｒ１(1)

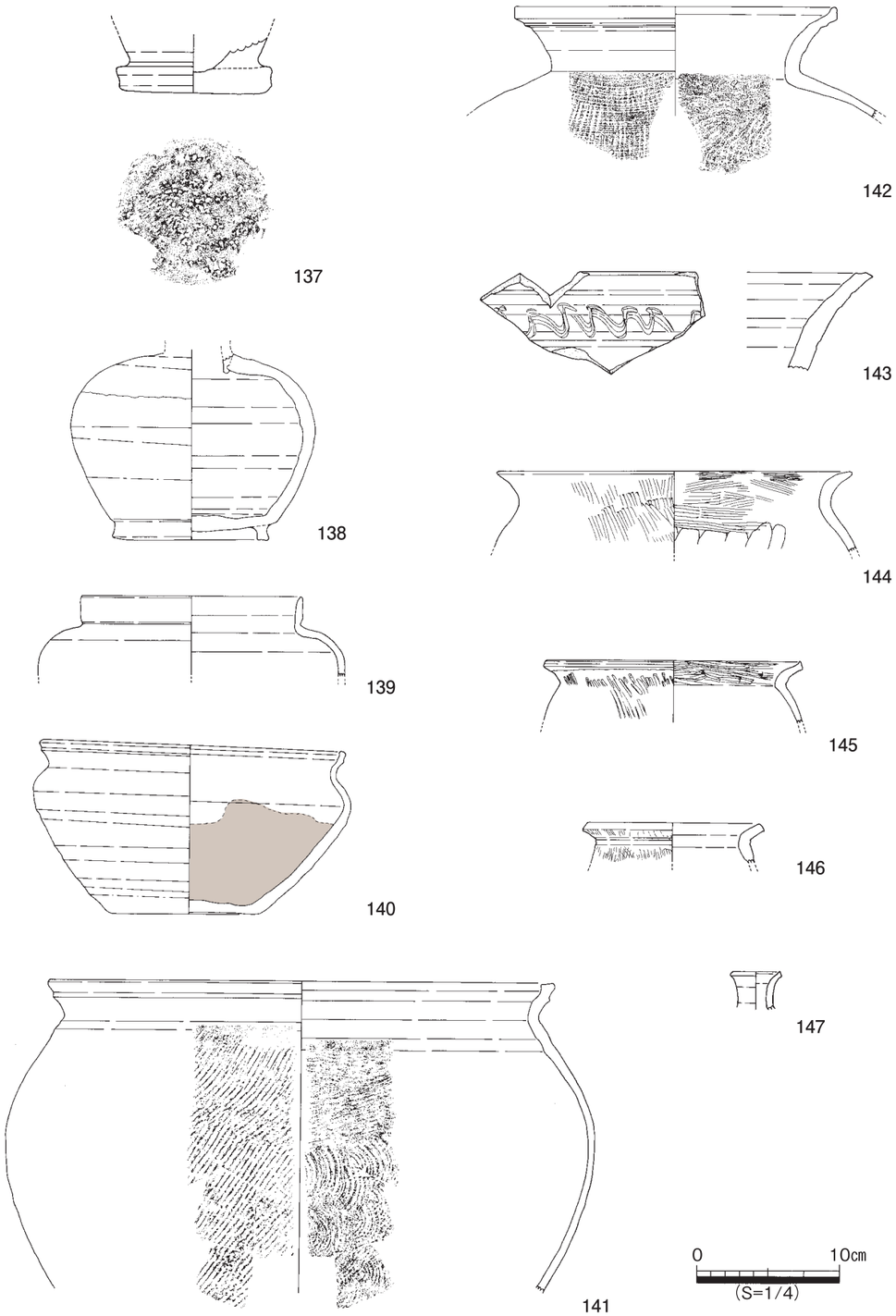

図72　ＳＸ１－Ｒ１(2)

ＳＸ１－Ｒ１(2)

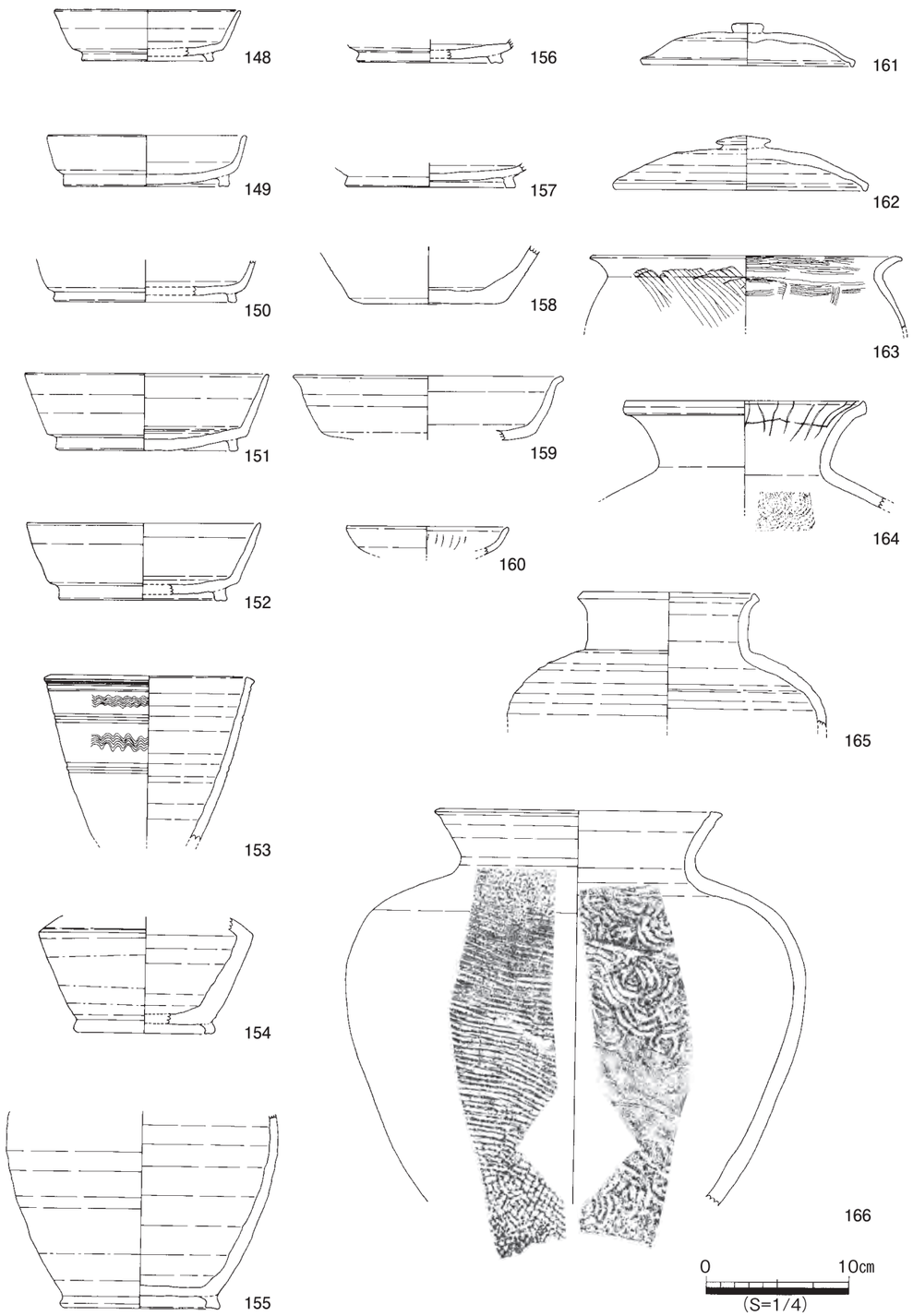

図73　ＳＸ１－Ｒ２(1)

ＳＸ１－Ｒ２(1)

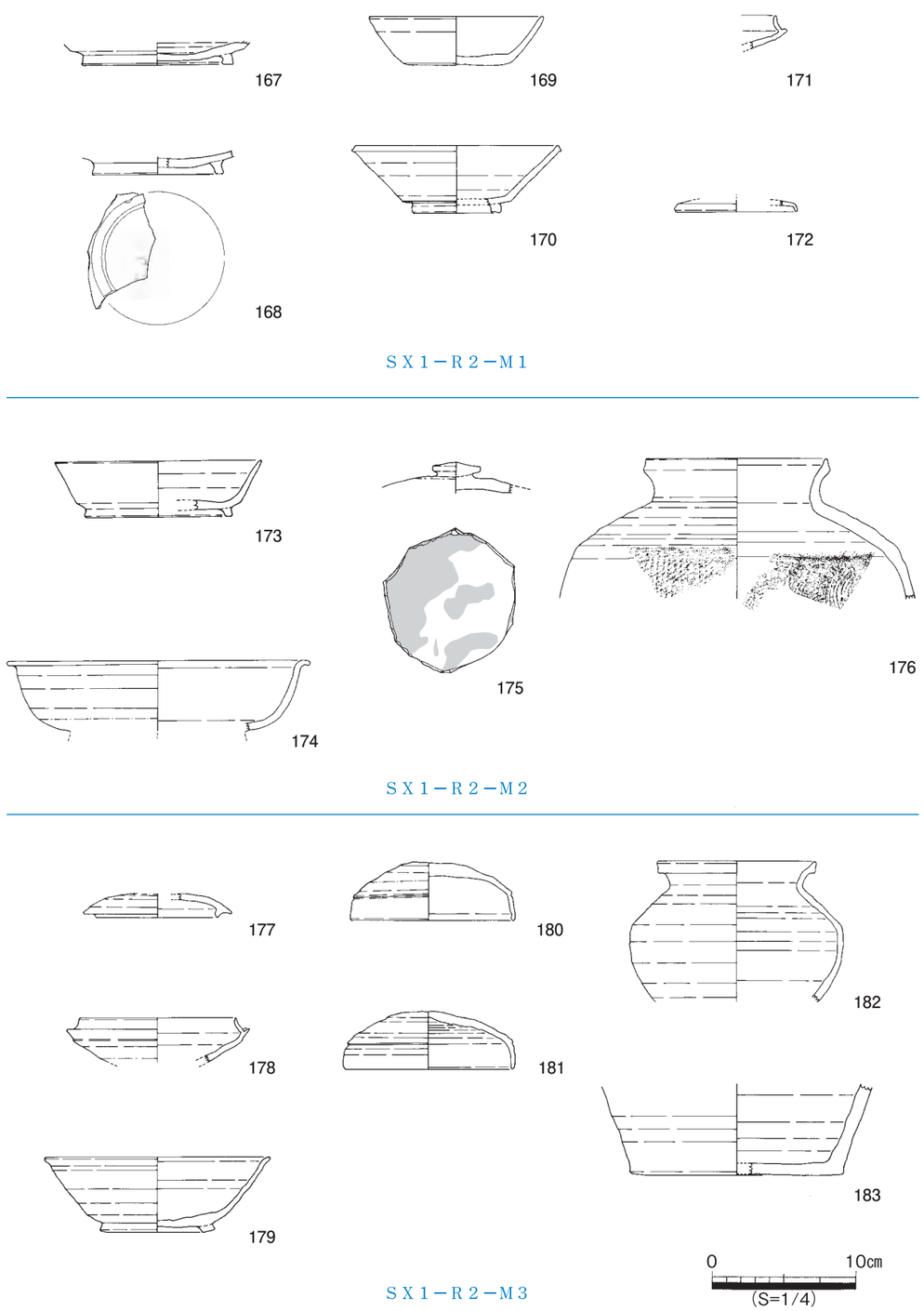

図74　SX1－R2(2)

SX1－R2(2)

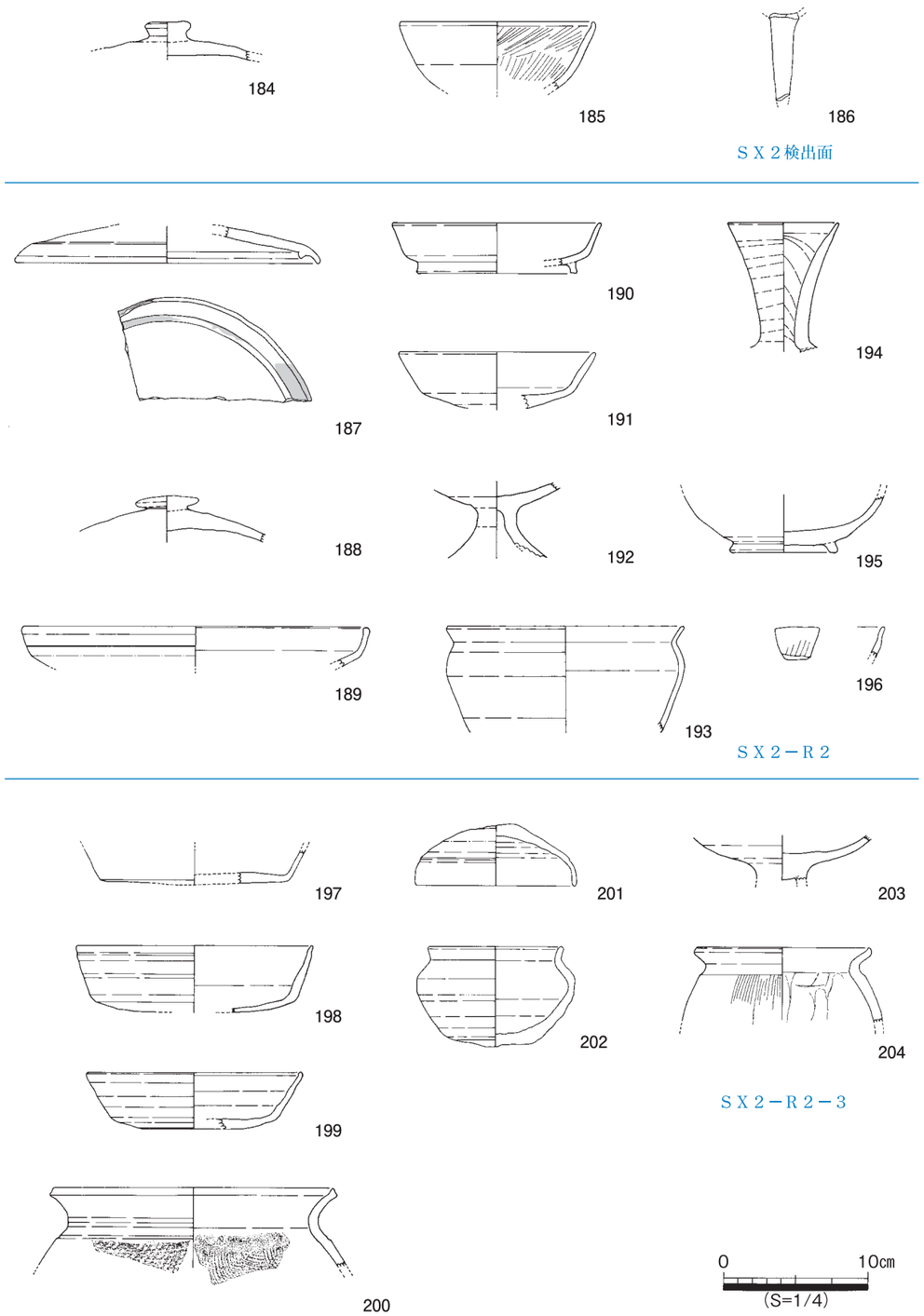

図75　ＳＸ２

ＳＸ２

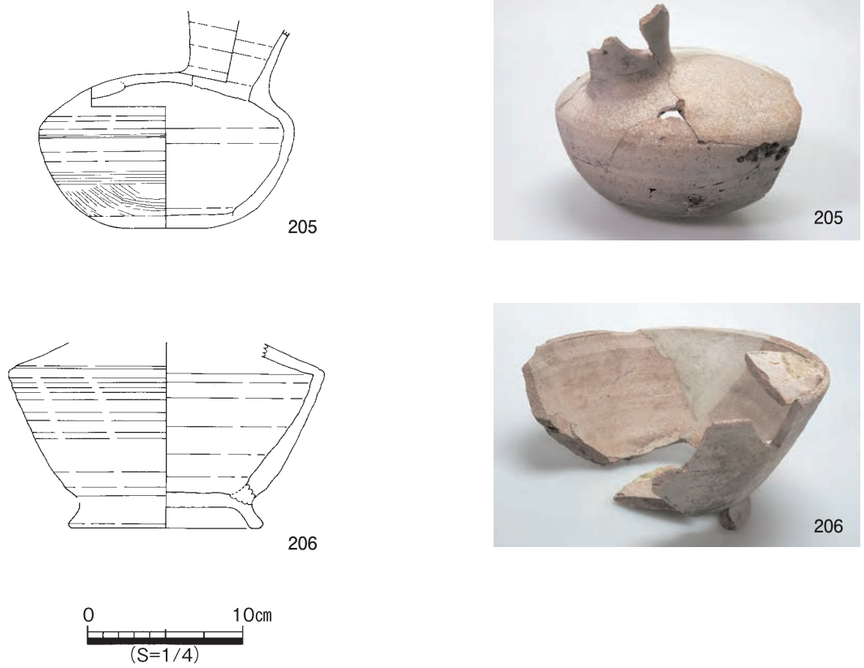

図76　ＳＸ１・２接合(1)

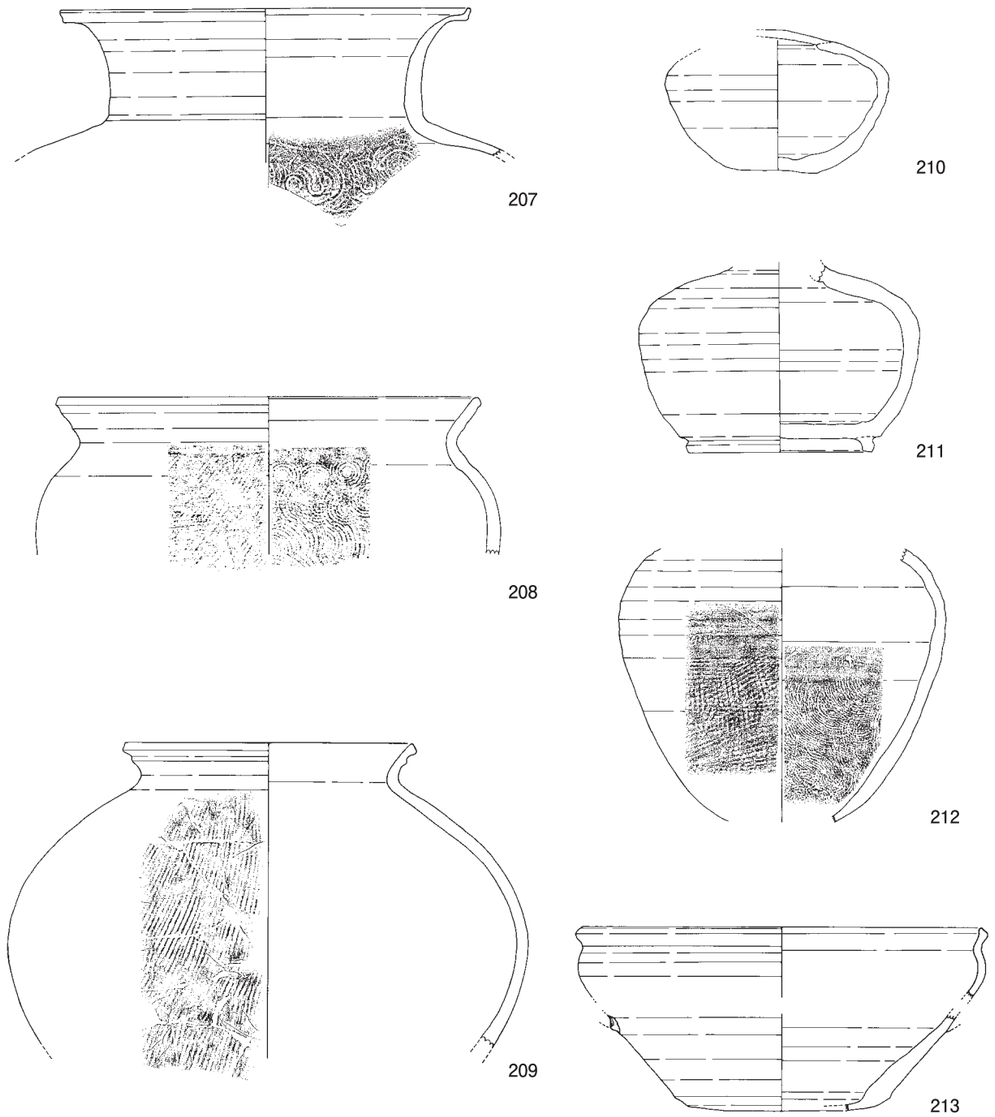

図77　ＳＸ１・２接合(2)

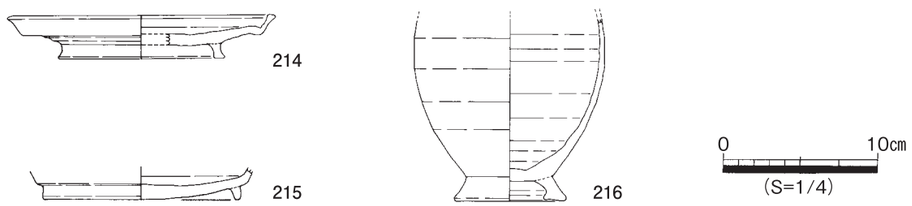

図78　ＳＤ１とＳＸ１接合(1)

ＳＸ１・２接合(2)

ＳＤ１とＳＸ１接合(1)

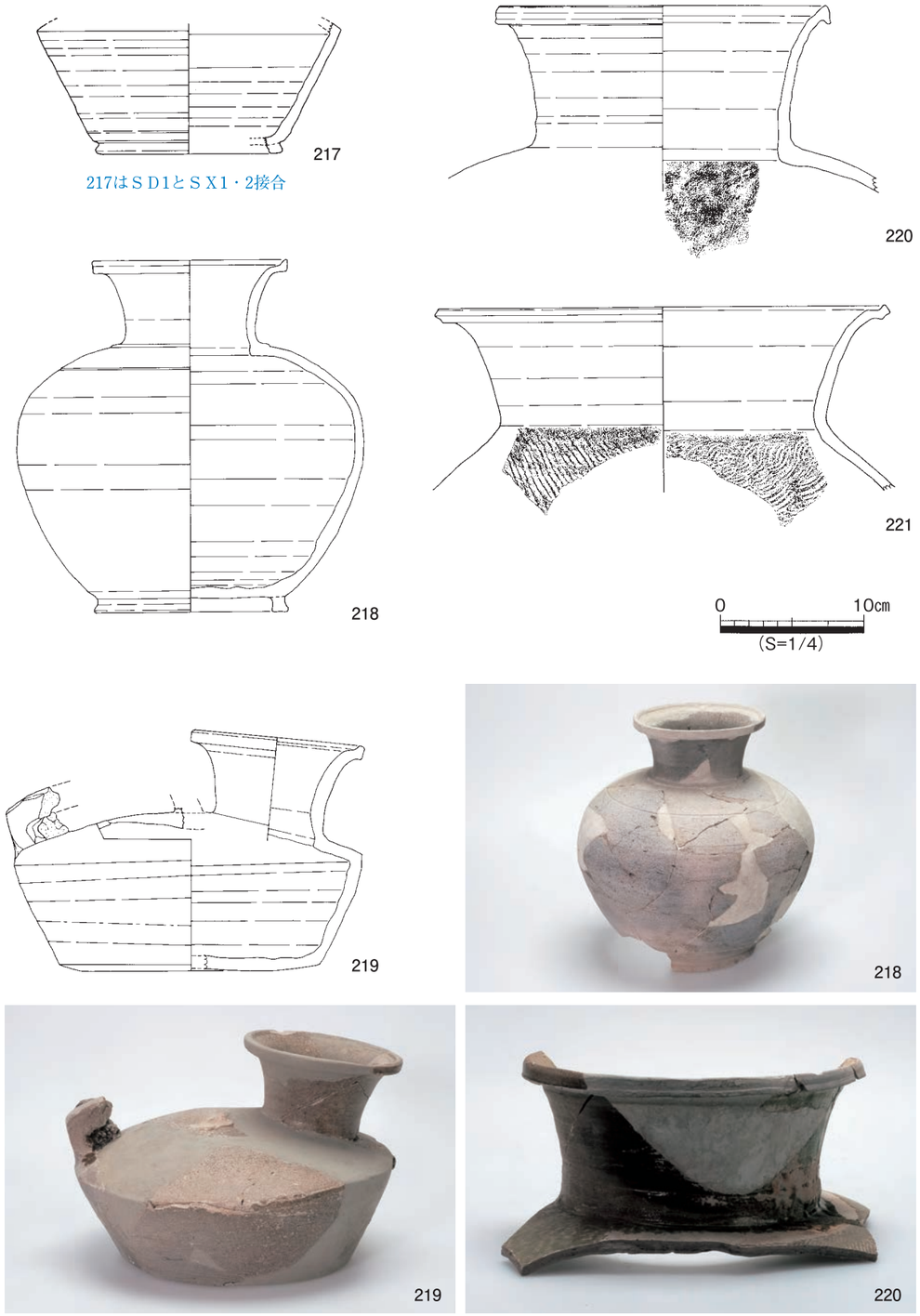

図79　ＳＤ１とＳＸ１接合(2)

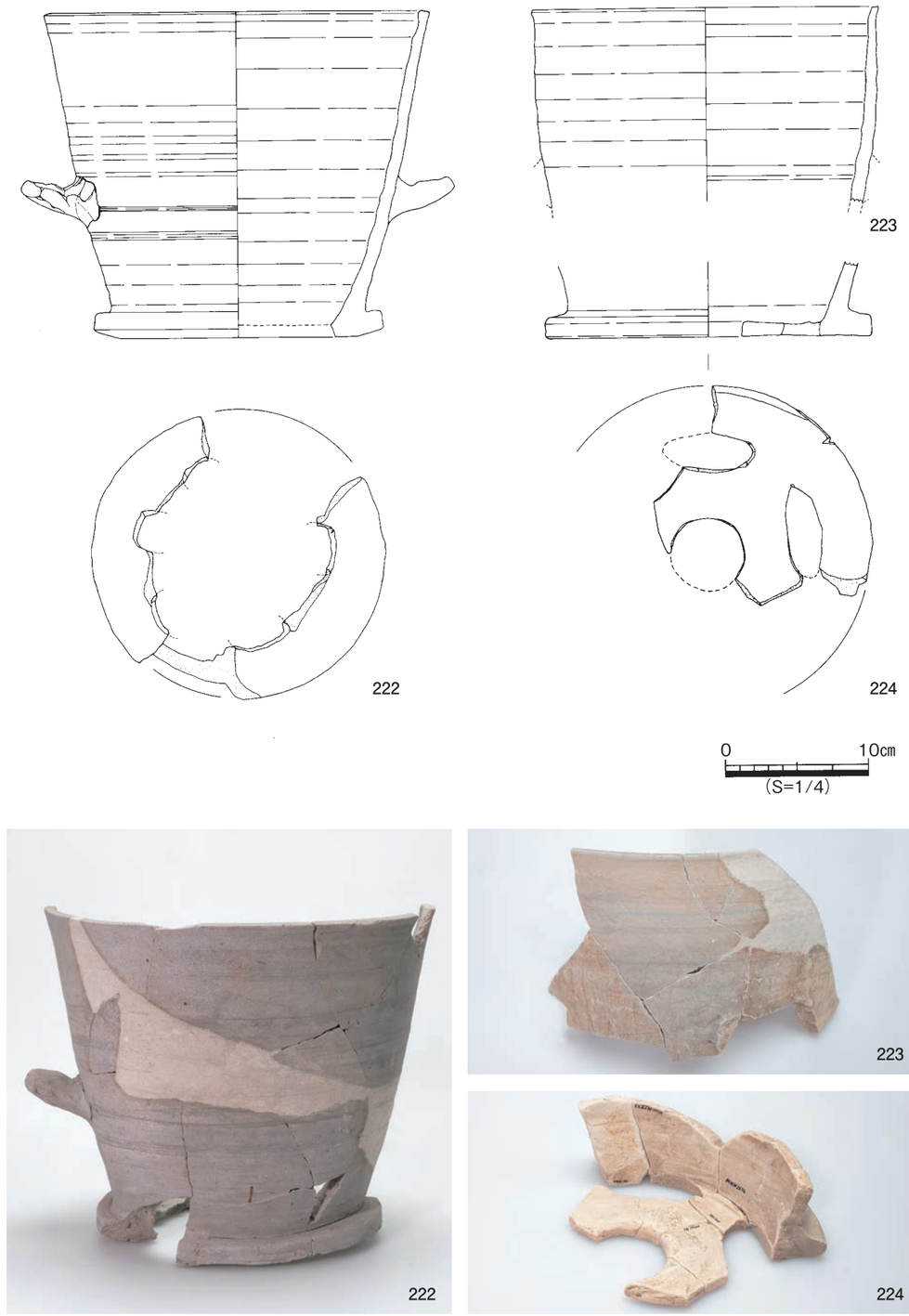

図80　ＳＤ１とＳＸ１接合(3)